

女子中学生の月経対処と学校環境要因の 関連性分析

——寧波市 Q 中学における調査を踏まえて——

WANG Yihan

本研究は、経済発展が著しい中国沿海部の都市・寧波市の公立中学校をフィールドに、女子生徒の月経対処(MHM)の実態と、それを規定する学校環境要因(物理的・制度的・文化的)との相互作用を解明するものである。近年、国際社会では月経を女性の基本的人権として捉える視点が定着し、「月経貧困」への対策が進んでいる。しかし、本研究は物質的な欠乏が解消されつつある都市部においてこそ、学校空間に潜む「見えざる障壁」が女子生徒の尊厳と健康を損なっている事実に着目する。近代的な校舎と高い学力水準を誇る Q 中学校の内部で、制度的な配慮の欠如や「隠れたカリキュラム」がいかんにして月経を不可視化し、生徒に身体的・心理的な葛藤を強いているのか、その構造を社会学的視座から明らかにすることを目的とする。

研究方法として、本研究は質的調査法を採用し、寧波市 Q 中学校の中学 2 年生女子生徒 10 名および女性担任教師 1 名を対象に構造化インタビューを実施した。インタビューでは、月経に関する知識の習得経路、学校生活における具体的な対処行動、困難に直面した際の感情や戦略について詳細に聴取した。さらに、校内の女子トイレ、医務室、教室などの物理的環境に対する現地調査を行い、生徒の語りと実際の環境との整合性を多角的に分析した。

分析の結果、Q 中学校の環境には、女子生徒の月経対処を多角的に阻害する構造的な欠陥が存在することが明らかになった。

第一に、物理的環境における「オブジェクションの空間化」である。近代的な外観とは裏腹に、女子トイレは個室数の不足、照明の暗さ、温水や石鹸の欠如といった問題を抱えていた。中でも決定的だったのは、個室に「蓋のないゴミ箱」が設置されている点である。使用済みナプキンが他者の視線に晒されるリスクは、生徒に強烈な羞恥心を与え、月経血を「忌避すべき汚穢」として再生産させている。また、医務室は男性医師のみの配置や生理用品の備蓄欠如

により形骸化しており、生徒にとって心理的にアクセス不可能な場所となっていることが判明した。

第二に、制度的環境における「時間のポリティクスと身体規律」である。学校の厳格な時間管理は女子生徒の生理的リズムと鋭く対立している。10分間という短い休み時間は移動と混雑を考慮すると生理用品交換には不十分であり、さらに常態化する「授業延長」がそのわずかな時間さえも剥奪している。この抑圧に対し、生徒たちは授業への遅刻というペナルティを回避するため、生理的欲求を意識的に抑制し、不快感や漏れの不安を抱えながら次の休み時間まで耐える「計算された忍耐」を身体化させていた。また、生理休暇に関する公的な規定が存在せず、体調不良時の対応が教師個人の裁量に委ねられている現状は、生徒の権利としての休息が制度的に保障されていないことを示している。

第三に、文化的環境における「教育の断絶とジェンダー規範」である。学校での生物学教育は生殖メカニズムの解説に終始し、生理用品の選び方やPMS(月経前症候群)への対処といった実践的知識は欠落していた。この教育の空白を埋めているのは、母親やインターネット上の非公式なネットワークであり、学校は教育責任を私的領域へ転嫁している。さらに、男子生徒への教育不足は無理解やからかいを生み、女子生徒の月経羞恥を増幅させる要因となっていた。こうした過酷な環境に対し、生徒たちはナプキンを過剰に包装して捨てる「隠蔽儀礼」や、濃い色の服で漏れのリスクを管理するなどの「防衛的な行動戦略」を構築し、個人の努力で適応しようとしていた。

以上の考察を踏まえ、本研究は現代中国都市部の学校における月経問題の本質が、物質的な貧困ではなく、学校組織による「制度的無視」にあると結論づけた。学校がケアの責任を放棄し、その負担を生徒個人の忍耐や家庭に転嫁している現状に対し、本研究は以下の実践的変革を提言する。まず、物理的側面では「ユーザー中心設計」に基づき、蓋付きゴミ箱の設置やプライバシー空間の確保を行うこと。次に制度的側面では、教師の裁量に依存しない生理休暇制度を確立すること。そして文化的側面では、男子生徒を含めた包括的なジェンダー教育を実施し、月経を「個人の秘密」から「学校全体の課題」へと再定義することである。これらは、生徒の尊厳を守り、持続可能な学校環境を構築するための不可欠な指針となる。